

『ある校長の講話から』

ある中学校の校長が、全校集会の場で生徒たちに次のような話をしたそうです。

皆さんは、「南極物語」を知っていますか。映画にもなった実話です。

あらすじはこうです。1958年2月、日本の南極観測隊が観測に利用していた犬ぞりの犬を、日本に帰るときにやむをえず南極に置き去りにしました。1年後に南極に戻ったところ、タロとジロという名前の犬2頭だけが生きていて、探しに来た隊員のもとに駆け寄ってきたという感動的なお話です。犬は南極での冬の間、ペンギンなどを食料にしていたとのことでした。

話は変わりますが、金子みすゞさんの詩に「大漁」という作品があります。ちょっと読んでみます。

「大漁」

朝焼け小焼けだ 大漁だ 大羽鰯（いわし）の 大漁だ
浜は祭りのようだけど 海の底では何万の
鰯（いわし）のとむらいするだろう

この詩は、大漁の喜びに沸き、お祭り騒ぎの漁村を描くとともに、その反対の立場にある魚の側からの悲しみをも見つめています。

実は、先ほどの「南極物語」について、星新一さんという作家が人間の立場でなく「ペンギンの身になってみろ」と思ったという逸話が残っています。ペンギンは、南極観測隊に置いていかれた犬に食料とされていました。ですから、「南極物語」は人間にとっては感動的なお話ですが、ペンギンは突然現れた敵がようやくいなくなり、せいせいしたことでしょう。

この経験をもとに、星新一さんは「探検隊」というお話を書いていますので、興味のある人は読んでみてください。

ここに共通して言えることは、すばらしくうれしく感動的な話も、立場が違えばまったく反対の悲しく冷たい話になるということです。相手の立場に立ってものを考えることが大切なのです。

今、皆さんの周りでも同じようなことは必ずあるはずです。たとえば、クラスのほとんどが笑うようなおもしろい話や冗談でも、たった一人でも反対に感じている人はいないでし

ょうか。もし一人でもそういう人がいたなら、その人からみるとその話は、おもしろい話でも何でもなく、とても悲しい話だといえます。

クラスのほとんどの人にとっておもしろい話をした人は、笑うことのできなかった一人の人にとってはひどく冷たい人だともいえます。

もし、そんな場面があったなら、どうすればいいかを考えてみてください。そして、まずはそういうことに気づける人になってほしいと思います。

という講話を全校生徒の前でしたそうです。

この講話の中で校長先生は、生徒たちがこれから生きていくうえで欠かすことができない大切な視点を訴えかけていると思います。それは、単一的なものの見方ではなく多角的なものの見方によって気づくことができるということです。また、気づくことができた場合、あなたはどうすればよいのか考えてみてくださいと投げかけられています。

他者の考えや思いを知り、大多数の意見やものの見方に流されることなく自分なりの考えを深めること、人としてどうすればよいのかを自分に問うことができる子どもたちを育てていきたいものです。